

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 5 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23401008

研究課題名(和文) フィリピンにおける「貧困問題」の再検討：社会ネットワークの動的的分析

研究課題名(英文) Poverty and Social Networks in the Philippines

研究代表者

中西 徹 (NAKANISHI, Toru)

東京大学・総合文化研究科・教授

研究者番号：30227839

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、フィリピンにおいて、有機農業が、貧困層の福祉の要である「社会ネットワーク」の深化を促進し、貧困削減を実現するための戦略として有用であることを示した。有機農業は、環境面や食の安全面のみならず、政治面(政治的自由の実現)、経済面(長期的な生産性の高さ)、社会面(有機農業と社会ネットワークの深化との相互作用)の特性からも、貧困層の「福祉」水準の向上に貢献してきたのである。それは、低地米作農村のみならず、ミンダナオ島やネグロス島の少数民族が有機農業を意図的に営んできたことにも現れている。また、そこにおける市場や国家との間の適切な距離を維持する対応は、海洋少数民族にも観察される戦略原理である。

研究成果の概要(英文)：This study shows that the organic agriculture can be an important strategy for the poverty reduction by promoting the development of social networks among the poor in the Philippine setting. It has been often explained that the organic agriculture has advantages mainly in environmental conservation and food safety. We verify that it contributes to the improvement of various welfare indices of the poor such as political freedom, productivity of agricultural products and interactions with social networks. This proposition is also illustrated by the fact that ethnic minorities in Negros and Mindanao islands have developed their own organic agriculture by using the techniques peculiar to their communities. It can be also observed that the livelihood strategies of other ethnic minorities in the low-land have been basically to try to keep a distance from the markets or the central government in the Philippines.

研究分野：地域研究

キーワード：フィリピン 貧困 社会ネットワーク 有機農業

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究の学術的背景には、大陸東南アジアの少数民族についての政治学的歴史研究と社会関係資本(social capital)論がある。ベトナム北部からインド東北部に至る地域と中国南部の国境周辺に囲まれた Zomia と呼ばれる地域についての最近の少数民族研究は、そこに居住する1億を超える少数民族の多くが、決して先住民だけではなく、またその社会は、非文明的ではなく、中国や周辺地域の稲作定住国家の支配を回避した自治を重んじる高地民社会であったという重要な事実を発見した (Scott, 2009)。そして、高地民は、周辺地域から支配を受けないように、外部からの接近が困難な自然条件の下、平等主義、高い移動性、多言語や民族的流動性を容認する社会集団を創造するに至ったと議論する。この研究は、画一的政策によって貧困層を管理保護することに重きをおいてきた開発研究に大きな影響を与えつつある。そこで、本研究は、これらの議論では十分に検討されていない「社会関係」に着目し、Zomia 研究のロジックの発展途上国研究への適用可能性について考察を深めていくことを意図した。

(2) 第二に、本研究は、開発過程における「社会関係」を重視するという点で、Robert Putnam, Nan Lin, Deepa Narayan らの「社会関係資本」(social capital)の研究とも密接な関係を有している。従来社会関係資本論は、社会関係が有する経済的便益に寄与する「資本」としての役割に注目し、コミュニティが共同利害の実現に果たす役割をあきらかにするという成果を挙げてきた。しかし、広くアジアにおける貧困研究は、定住誘因となる社会関係の緊密化こそが共同利害を生み出すという逆の因果関係の可能性をも示唆している。本研究は、この観察を重視し、社会関係を「資本」ではなく、いわば「発展指標」の一要素と見なすことによって、社会関係資本を強調する既往の諸説を補完し、「社会関係」をめぐる議論を発展したいと考えた。

2. 研究の目的

(1) これまでの貧困削減政策は、しばしば貧困層が直面する非経済的な問題への配慮を欠きがちだと論じられてきた。居住環境が劣悪なスラムでは所得上昇とともに人々の定住傾向が強くなったり、高地少数民族が政府から提示された低地における定住機会を拒否し高地に戻ったりするのはその証左のように思われる。

(2) 本研究の目的は、このような事情とフィリピンの生態系と文化の多様性に鑑み、「低地フィリピン人社会」と「少数民族社会」の複数の小社会集団を対象として、「貧困層は、条件によっては、経済的便益よりも非経済的

動機に基づく社会関係を重視し得る」という基本仮説を参与観察と社会ネットワーク分析によって検証し、小社会集団に固有な社会関係構造の動態という新しい視角から、発展途上国が直面する「貧困問題」を再考することである。

3. 研究の方法

(1) 互いに異なる生態系、文化を有する、「低地フィリピン人社会」と「少数民族社会」の複数の小社会集団について、主として5つの主題についての現地語による調査を実施する。すなわち、対象小社会集団とその単位を特定化する、社会ネットワーク・データを収集する、経済指標、社会的威信などの個人属性を析出する、文献調査、面接調査および参与観察によってその社会集団にとって「重要な事件」を把握し、集団に固有な時間軸を策定する、マクロの経済指標、地域開発政策などの外的条件の変容を長期的に把握するというものである。

(2) そして、これらの調査によって得られたデータに基づき、社会経済的ないしは政治的条件の変化と、社会ネットワークの変化がどのような相互依存関係を有しているのかを動的に明らかにし、発展途上国における多様な「貧困問題」理解のための新しい枠組み構築を目指す。

4. 研究成果

(1) 研究過程において、フィリピンにおける有機農業の発展が、環境保全のみならず貧困緩和についての諸問題の解決に大きな役割を果たし得ることがあきらかになり、大きな発展をみた。

(2) 第一は、政治的特性である。「慢性的貧困」を解決する上で、有機農業が有する政治的・経済的自由があきらかになった。有機農業は、Scott (2008) のいう「熟慮に基づく政治的選択」としての「逃避型農業」であり、それは、自由を希求する農民にとっては、現代社会においては最も現実的な選択肢だということである。

科学農業へと「発展」する過程において、「画一化」にもとづく効率化は、少なくとも短期的ないしは中期的には、農業生産性を上昇させた。しかし、それは農業が「国家」と「市場」に編入される過程でもあった。

1970年代以降、世界において同時期に発展してきた自然農法や有機農業は、程度の差こそあれ、このような農業の「市場化」への抵抗、あるいはグローバル化への対抗戦略という側面を有してきた。有機農業は、冒頭の「研究開始当初の背景」に論じた巧みに国家をかわしてきた Zomia の人々と、「匿名性を前提とした市場」との間に距離を置こうとしている点で、基本的な立場は共通している。すなわち、有機農業は、「国家」と「市

場」に支配されないために用意された、農民たちの対抗戦略なのである。これは、ミンダナオ島のダバオ市やネグロス島のバコロド市郊外の少数民族が、現在、有機農業を意図的に営んでいることにも現れていると考えられる。また、市場や国家から距離をとる戦略は、海洋少数民族のバジャオにも観察される生存戦略として考えられる。

(3) 第二は経済的特性である。すなわち、有機農業は、通説とはことなり、貧困緩和のための生産性基準からも実効性が高いことが、本研究によって、あきらかになった。調査地の一つであるヌエヴァ・エシハ州は、米生産性がフィリピンでも最も高い地域の一つに属する。この地域は、有機農業の導入後、15年以上を経ているが、有機農家と慣行農家の生産性の間には格差がないことが示されたのである。すなわち、有機農家 17 戸、慣行農家 25 戸の平均耕地面積と平均収量のデータによれば、有機農家、非有機農家で、ヘクタールあたり平均収量は、乾期作でそれぞれ 112.88 cavan(約 5.64t, 標準偏差: 18.41), 113.17 cavan(約 5.66t, 27.30), 雨期作では、同じく, 100.44 cavan(約 5.02t, 16.85), 99.17 cavan(約 4.96t, 19.18)である。Welch の t 検定によれば, $t = .0372$ (乾期), $t = .2152$ (雨期)となり、2 群の間には有意な差は認められない

しかも、ひとたび、有機農業が軌道に乗れば、費用面においても、決して慣行農業に劣らない。たとえば、下の【表 1】は、調査地において、近接する土地を、それぞれ有機農法、慣行農法によって耕作する所有面積 1 ヘクタールの自作農の経営を示したものである。二人ともマルコス期の農地改革によって自作農となった元小作農である。この事例は、有機農家が、コスト面でも、収量面でも、非有機農家のパフォーマンスを上回っていることを示している。これは一例に過ぎないが、農法以外の条件は、同等であり、それなりに意味を有する事例であろう。

【表 1】調査地における農家経営の差異

	非有機農家 (1ha, 100 cavan/ha)					有機農家 (1ha, 100 cavan/ha)				
	人	日	人日	費用	生産物価値	人	日	人日	費用	生産物価値
苗床準備・播種	2	1	2	3,000		2	1	2	1,200	
整地	2	2	4	2,000		2	1	2	2,000	
田植え	20	0.5	10	2,000		20	0.5	10	2,000	
灌漑管理	1	1	1	2,600		1	1	1	2,600	
除草	1	1	1	1,000		5	0.5	3	2,100	
施肥	1	2	2	8,800		4	1	4	10,500	
防虫・害虫駆除	1	3	3	3,000		1	1	1	1,000	
刈取り・脱穀・運搬	5	1	5	5,600		10	1	10	5,950	
実生選別						1	1	1		
乾燥	2	1	2			1	1	1		
合計			30	28,000	92,800			35	27,350	98,600
粗収益					64,800					71,250

(出所) 筆者作成

ここで、それにもかかわらず、有機農家比率が低いのは農家が有機農業自体を拒絶していることを意味しない。問題は有機農業に

必要な初期投資としての投入財、有機肥料である。移行期農家を除けば、村の有機農家では購入するものはおらず、すべて自家生産で工面しているが、有機肥料の生産には 1 ヶ月を要するうえに、初期投資として、子牛に 5,000 ペソから 15,000 ペソ程度の投資が必要だからである。このことは、社会ネットワークの深化による相互扶助の発展ないしは必要に応じて適切な援助がもたらされれば、有機農業がより普及していくことを示唆している。

(4) 第三は、社会的特性である。貧困層にとっての「福祉」でもあり「資産」でもある「社会ネットワーク」と有機農業には、緊密な相互作用が内在している。すなわち、有機農業の発展には、社会ネットワークの醸成が不可欠であると同時に、有機農業は社会ネットワークの深化に貢献することがあきらかになったのである。

低地フィリピン社会では、コミュニティ全体が広く薄い親族ネットワークで覆われており、とくに「儀礼親族」のネットワークが有機農家間に密であることが知られている。ここで、「儀礼親族」とは、洗礼、堅信礼、結婚礼というカトリックの通過儀礼における証人を軸とする関係であり、依頼されることは、依頼される側からの信頼を得ていることを示す。それは、しばしば、依頼する側、される側の両者の利害関係に依存する社会経済関係に転化する。

【表 2】は、これらの状況を有方向ネットワークとして捉えたものである。それによれば、有機農業は、入次儀礼親族関係が豊富な世帯で浸透しやすく、その関係は有機農業浸透後も稠密化することが示される。コミュニティ資源の充実が有機農業を推進する因果律だけではなく、有機農業が、技術伝播、種子交換、伝統的農慣行を通じて、コミュニティの深化に貢献するという逆方向の因果関係も存在することが認められるのである。

【表 2】農家世帯の儀礼親族ネットワークの入次数

	有機農業導入以前 (~1995年)	有機農業導入以後 (1996年~13年)	平均増加回数
有機農家	3.7059	7.1429	3.4370
一般農家	1.4848	4.2609	2.7760
農家全体	1.9398	4.9333	2.9936

(出所) 筆者作成

それは伝統的農慣行の復活にも表れている。村内の人であれば、誰でも刈り取り作業に参加できるという無制限刈り取り慣行は、フィリピンでは、「緑の革命」後、衰退したと考えられてきた。ところが、この村では、

有機農家では、例外なく、この慣行が残存もしくは復活しており、それだけではなく、村内の非有機農家にも波及し、慣行が復活した例が多いことがあきらかになったのである。そして、コミュニティ間のネットワークの醸成にも有機農業は貢献しているといえよう。F1種の導入によって廃れてしまった種子交換は、伝統種を使って有機農業を導入している異なる村落の有機農民間で復活したのである。現在、ヌエヴァ・エシハ州の17村が持ち回りで種子交換会を行っている。

(5) 他の地方の有機農業についても、同様な論理が見出される。たとえば、南ダバオ州のダバオ市郊外や西ネグロス州のバコロド市郊外の少数民族を含む貧農層は、有機農業によって福祉水準の上昇を実現している。とくに、西ネグロス州における農民と消費者による有機農業運動の高揚は、西ネグロス州と隣接する東ネグロス州を動かし、2006年には遺伝子組換え種の排除と有機農業化の推進がネグロス島全域で地方政府によって宣言されるに至った。

(6) 以上の考察から、有機農業は、貧困層の福祉の要である「社会ネットワーク」の深化を促進し、貧困層の真の「福祉」の向上を実現するための戦略として有用であることが示されたと考えられる。従来、有機農業は、環境面や食の安全面から、その優位性が指摘されてきたが、本研究によって、政治、経済、そして社会の諸側面を含め、より広い意味で、発展途上国の貧困削減に大きな貢献をなし得ることがあきらかになったのである。

<引用文献>

James C. Scott, Yale University Press, *The Art of Not Being Governed: An Anarchist History of Upland Southeast Asia*, 2009, 442 pages.

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計9件)

青山和佳, "Living in the City as the Sama-Bajau: A Case Study of Biraiya's Family," 『白山人類学』, 査読有, 18号, 2015年(近刊)。

中西徹, "A New Counter-Strategy for Organic Farming Using Local Market Areas," *Book of Proceedings: Redefining Approaches in Agribusiness Management and Entrepreneurship for ASEAN 2015*, 査読有, 2014, 90-108.

中西徹, 「フィリピンの有機農業に学ぶ」, 『農村と都市をむすぶ』, 査読無, 748号, 2014年, 54~58頁。

中西徹, 「有機農業と環境保全: フィリピンにおける局地的市場圏の連繋」, 『国

際社会科学研究』, 査読無, 第63輯, 2014年, 35~49頁。

青山和佳, "To Become "Christian Bajau": The Sama Dilaut's Conversion to Pentecostal Christianity in Davao City, Philippines," *Harvard-Yenching Institute Working Paper Series*, 査読無, 2014年。

(<http://www.harvard-yenching.org/features/hyi-working-paper-series-aoyama-waka>)。

青山和佳, "Living in the City as the Sama-Bajau: A Case Study of Guwapo's Family," 『白山人類学』, 査読有, 17号, 2014年, 31~58頁。

青山和佳, "Social Inequality among Sama-Bajau Migrants in Urban Settlements: A Case from Davao City," 『白山人類学』, 査読有, 15号, 2012年, 1~38頁。

青山和佳, 「未来を投企するフィリピン人: 国内初の保健協同組合創設者の語りより」, 『東南アジア研究』, 査読有, 第50巻第1号, 2012年, 37~69頁。

中西徹, 「有機農業とコミュニティ資源: 有機農業は持続的発展の実現と生物多様性の確保の鍵となり得るか?」, 『国際社会科学』, 査読無, 第61輯, 2012年, 99~121頁。

[学会発表](計8件)

青山和佳, "What Do Disasters Reveal about the Society?: A Case Study of the Fire that Hit the Sama-Bajau Community in Davao City," *National Conference on Philippine Studies*, 2014年11月12日~2014年11月14日, National Museum, Manila, Philippines.

中西徹, "Sharing Wisdom: Thailand, Philippines, Zomia and Japan," *Sustainable Development: Sharing Wisdom Between Thailand and Japan*, 招待講演, 2014年11月11日, 外国人特派員協会, (東京・千代田区)。

中西徹, "A New Counter-Strategy for Organic Farming Using Local Market Areas," *The 1st Global Agribusiness Management and Entrepreneurship Conference*, 招待講演, 2014年10月23日, Hotel Dusit Thani, Makati, Metro Manila, the Philippines.

青山和佳, "The Life and Death of Papa Melbasa: A Prelude to the Christian Conversion of the Sama Dilaut Migrants in Davao City, Philippines, in the late 1990s," *Harvard-Yenching Lunch Talk*, Harvard-Yenching Library, Cambridge, U.S.A., March 6, 2014.

中西徹, "Non-Conventional Farming as An Art of Not Being Governed," *The Sus-*

Sustainable Shared Growth Seminar, 招待講演, 2013年08月23日, University of the Philippines, Diliman, Quezon City, the Philippines.

中西徹, "The Social Networks among the Poor in the Philippines," 『千葉大学経済学会』, 招待講演, 2012年12月07日, 千葉大学法経学部(千葉県・千葉市).

中西徹, "Sustained Poverty for Economic Development and Regeneration of Community-Based Resources," *The 14th SGRA Seminar on Urban Rural Gap and Sustainable Shared Growth*, 招待講演, 2012年4月26日, University of the Philippines, Quezon City, Metro Manila, Philippines.

中西徹, "Social Network Analysis of Community Dynamics," *Social Network Seminar*, 招待講演, 2012年02月23日, Temple University of Japan (東京都・港区).

〔図書〕(計4件)

Ferdinand E. Maquito・中西徹 (Tran Van Tho ほかと共著), 文真堂, 『ASEAN 経済新時代と日本』(「フィリピン経済」を分担執筆), 2015年(近刊).

中西徹 (内田隆三ほかと共著), せりか書房, 『現代社会と人間への問い』(「弱者」の戦略: 市場に抗する有機農業」を分担執筆), 2015年(近刊).

中西徹 (大野拓司ほかと共著), 明石書店, 『フィリピンを知るための63章』(大野拓司ほか編(「インフォーマルな民衆経済(仮題)」を分担執筆), 2015年(近刊).

青山和佳 (大野拓司ほかと共著), 明石書店, 『フィリピンを知るための63章』(「貧富の格差(仮題)」を分担執筆), 2015年(近刊).

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中西 徹 (NAKANISHI, Toru)
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号: 30227839

(2) 連携研究者

青山 和佳 (AOYAMA, Waka)
東京大学・東洋文化研究所・准教授
研究者番号: 90334218